

35. エトポシドによる2次性白血病を合併したと考えられる扁平上皮癌の1症例

坂尾誠一郎, 鈴木浩太郎 (船橋中央・内科)
大久保春男 (同・病理)
深沢 元晴 (千大・2内)

今回私たちは、エトポシド関連2次性白血病を合併したと思われる肺癌症例を経験した。症例は72歳男性、平成4年1月扁平上皮癌を発症し2度の化学療法後、患者及び家族の希望にて平成7年1月よりペプシド25mg1錠連日投与を開始、平成8年8月急性骨髄性白血病を発症した。エトポシド投与患者は、治療関連2次性白血病の合併の可能性があり、今後は外来でのエトポシド持続投与の有効性を再検討していく必要があると思われた。

36. Lambert-Eaton 筋無力症候群を伴った肺小細胞癌の1例

新行内雅斗, 小島 彰, 岡田直美
藤田 明, 鈴木 光
(都立府中・呼吸器科)
板倉明司 (千大・肺内)

症例69歳男性。四肢筋力低下で発症し、画像上では腫瘍はなかったが、誘発筋電図の特徴的所見と抗VGCC (voltage-gated Ca^{2+} channel) 抗体陽性であり LEMS と診断した。その後、肺小細胞癌が発見され化学療法を行うも、症状の出現から約2年、化学療法開始から、約4カ月半で死亡した。

37. MRI にて下垂体茎部への転移が疑われ尿崩症を呈した肺腺癌の1例

橋本友博, 高村 大, 河野典博
(小田原市立)

62歳男性、肺腺癌経過中に食欲不振、全身倦怠感、口渇が出現し内分泌学的検索の結果、中枢性尿崩症が疑われ頭部MRIを施行した。その結果、下垂体後葉の高信号の消失と下垂体柄の腫大を認め転移性下垂体腫瘍による尿崩症と診断した。デスモプレシン5 μ g点鼻により自覚症状の改善を認めた。

38. 高CEA血症により発見された末梢小型肺癌の1例

本橋新一郎, 木村秀樹, 岩井直路, 山本直敬
(千葉県がんセンター・呼吸器科)

血中CEA高値にて発見された肺腺癌の一切除例を経験した。原発巣は非常に小型だったが著明な縦隔リ

ンパ節転移を認めた。病理組織学的には低分化型腺癌と乳頭腺癌が混在し、リンパ管侵襲が強く認められた。CEA染色では原発巣、転移巣ともにCEAの発現は高度で、高CEA血症の原因は肺癌と考えられた。

39. 横隔膜にポリープ様に発生した巨大腫瘍の1例

三橋京子, 佐藤圭一 (国立千葉・内科)
高澤 博 (国立千葉・病理)
鎗田 努 (鎗田病院)
君塚五郎 (千大・看護学部)

症例は68歳、女性。咳嗽出現し当科受診。胸部X線上下右肺野に異常陰影を認めた。画像診断上、径約10cmの充実性の腫瘍であり、経皮的吸引細胞診にて悪性と診断し、開胸術を施行した。腫瘍は被膜に覆われ、横隔膜よりつながる血管を認め、横隔膜由来と考えられた。病理組織学検索により悪性の限局性線維性胸膜中皮腫と診断した。

40. 気管支脂肪腫の1例

滝口恭男, 寺野 隆, 平井 昭
(千葉市立・内科)

症例は64歳、女性。主訴は呼吸困難。左大量胸水を指摘されて入院した。*S. intermedius* による膿胸と診断され、抗生剤投与と持続ドレナージにより軽快したが、気管支鏡にて左主気管支に隆起性病変が認められ、高周波スネアにて焼灼、摘出された。組織から気管支脂肪腫と診断された。

41. 基礎疾患なく発症し、胸壁原発と思われた非ホジキン悪性リンパ腫の1例

茶谷信行, 多部田弘士, 鈴木陽一
(船橋市立医療センター・内科)
木下孔明, 渋谷 潔 (同・呼吸器外科)
上原敏敬 (同・病理)

56歳女性、検診時胸部X線写真にて肺尖部胸膜肥厚様所見を指摘され来院。経皮的吸引細胞診にて成熟小型リンパ球様の細胞を認めるも確定診断に至らず、開胸生検にてB細胞由来のびまん性小細胞型非ホジキン悪性リンパ腫の診断を得た。結核等の先行する基礎疾患を認めず、胸壁に原発したと考えられる稀な悪性リンパ腫の1例と思われ、ここに若干の文献的考察を加え報告する。